

## 第 10 節 集落構成と諸活動

本遺跡で確認した竪穴住居跡、掘立柱建物跡、フラスコ状土坑などからなる濃密な遺構分布は、出土遺物の編年観から概ね縄文時代中期前半を中心とする時期に収まるものと考えられる。ここでは、前節までの出土遺物の検討に基づいて各遺構の具体的な機能時期を推定した上で、各時期の遺構の組成と配置および遺物の出土状況について検討を加え、集落構成の変遷および各時期の集落における諸活動について考察する。

### 1. 遺構の機能時期と構成

**遺構の機能時期** 本遺跡で確認した遺構について、遺構の重複による新旧関係、遺物の出土状況と特徴、放射性炭素年代などに基づいて機能時期を推定した。具体的な方法については第 3 章第 3 節 2（第 1 分冊）で述べた通りである。この結果、縄文土器の編年に基づく時

期区分（1 期：大木 6 式期、2 期：大木 7a 式期、3 期：大木 7b 式期、4 期：大木 8a 式期）のうち、多くの遺構が 2～4 期に位置付けられた（第 1・2 表）。よって、本遺跡の集落期は 2～4 期であり、出土遺物から時期を特定できなかった遺構についても基本的にはこの集落期の中に収まるものと考えられる。

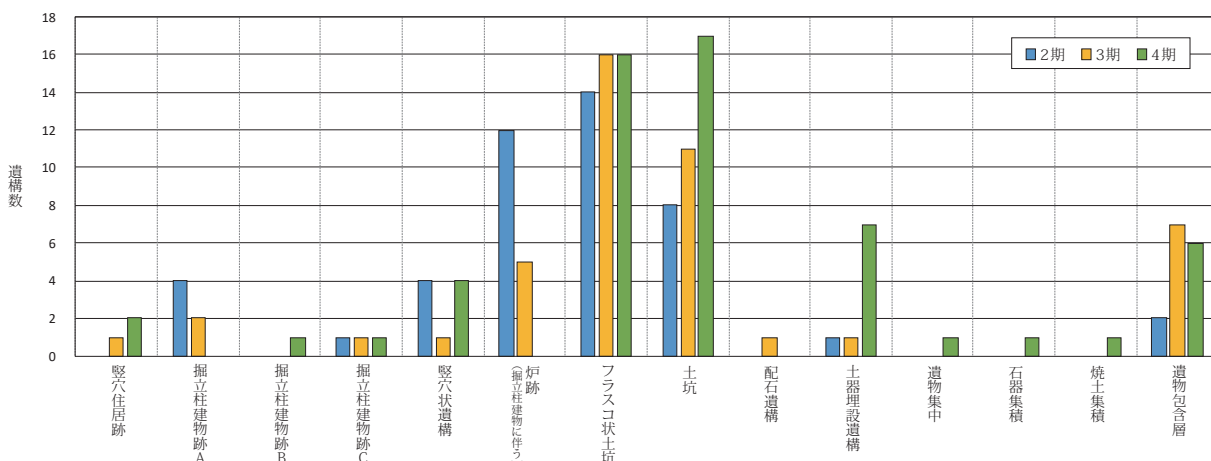
**遺構の構成** 各時期の遺構の構成（第 1 図）を見ると、2 期は掘立柱建物跡 A・C、竪穴状遺構、フラスコ状土坑などで構成され、遺物包含層の形成も始まっている。建物の主体は長大な六角形（亀甲形）の掘立柱建物 A である。掘立柱建物 A は床面に地床炉を持ち、いわゆる平地住居形式の建物と考えられる。3 期は竪穴住居跡、掘立柱建物跡 A・C、竪穴状遺構、フラスコ状土坑、配石遺構などで構成され、遺物包含層が広範囲に形成される。建物は竪穴住居と掘立柱建物 A が並

第 1 表 遺構の時期別構成

遺構種別	機能時期（形成時期）					合計
	集落期			新期	不詳	
	2 期	3 期	4 期			
竪穴住居跡		1	2			3
掘立柱建物跡 A	4	2				6
掘立柱建物跡 B			1			1
掘立柱建物跡 C	1	1	1		1	4
竪穴状遺構	4	1	4		1	10
炉跡	12	5			1	18
フラスコ状土坑	14	16	16		10	56
落とし穴状土坑				2		2
土坑	8	11	17	1	359	396
配石遺構		1				1
土器埋設遺構	1	1	7		3	12
遺物集中			1			1
石器集積			1		4	6
焼土集積			1		18	19
遺物包含層	2	7	6		1	16
溝跡				3		3
総計	46	46	57	6	398	553

※複数の遺構で構成される 2～4 期を集落期、これより新しいものを新期とした。主要な遺構の大半は時期不詳を含めて集落期に含まれると考えられるが、土坑には一部新期のものが含まれる可能性がある。

※上表では遺構の重複による新旧関係から 2 期以前あるいは 4 期以降と判断されたものを集落期の 2 期あるいは 4 期に含めて集計した。また、複数時期にまたがる遺物包含層は該当する各時期に集計した。



第 1 図 遺構の時期別構成

第2表 遺構の機能時期

遺構種別	機能時期（形成時期）			
	集落期			新期
	2 期	3 期	4 期	
竪穴住居跡		SI1	SI20・22	
掘立柱建物跡 A	SB167・256・363・741	SB358・362		
掘立柱建物跡 B			SB611	
掘立柱建物跡 C	SB740	SB364	SB360	SB366
竪穴状遺構	SX155・510・622・1018	SX1008	SX2・3・4・7	SX647
炉跡	SX208・213・372・373・374・375・377・392・393・394・733・743	SX200・294・295・296・304		SX734
フラスコ状土坑	SK191・241・242・244・265・266・268・276・280・292・315・321・534・723	SK41・87・90・108・116・122・123・126・134・196・262・267・282・606・612・721	SK28・40・43・83・84・86・91・124・133・206・214・274・368・369・508・1006	SK72・95・197・222・253・284・317・347・370・592
落とし穴状土坑				SK583・594
土坑	SK359・501・511・512・576・614・640・735	SK303・320・519・523・525・546・550・609・656・699・1007	SK38・135・148・171・190・216・255・307・326・328・524・591・651・654・659・662・664	SK31 +
配石遺構		SX739		
土器埋設遺構	SX630	SX319	SX180・215・271・288・342・584・719	SX199・322・1001
遺物集中			SX732	
石器集積			SX144・744・745	SX137・177・367・744
焼土集積			SX582	+
遺物包含層	SX361・717	SX17・290・353・608・610・666・717	SX14・17・353・610	
溝跡				SD5・16・21

※複数の遺構で構成される2～4期を集落期、これより新しいものを新期とした。不詳としたものの多くは集落期に含まれ、一部新期が含まれる可能性がある。※2期以前あるいは4期以降と判断されたものは集落期の2期あるいは4期に記載し、複数時期にまたがる遺物包含層は該当する各時期に記載した。※不詳の「+」は多数に及ぶため記載を省略した。

存する。4期は竪穴住居跡、掘立柱建物跡B・C、竪穴状遺構、フラスコ状土坑、土器埋設遺構、石器集積などで構成され、遺物包含層が引き続き広範囲に形成される。建物は折衷的な掘立柱建物Bを含めて竪穴住居が主体である。柱穴を持たない簡易な構造の竪穴住居と考えられる竪穴状遺構も複数見られる。また、土器埋設遺構が多く作られる。本報告書では柱穴状の掘方内に深鉢を正位または逆位に据えるものを土器埋設遺構としたが、皿状ないしは断面逆台形の大小の土坑内から浅鉢・深鉢が倒位で出土しているものについても土器埋設遺構あるいは土壇墓としての性格を持つ可能性がある。また、底面から大型の棒状石製品や珪質頁岩製の長大な打製石斧、礫石器などが出土しているSK28フラスコ状土坑は転用墓の可能性もある。

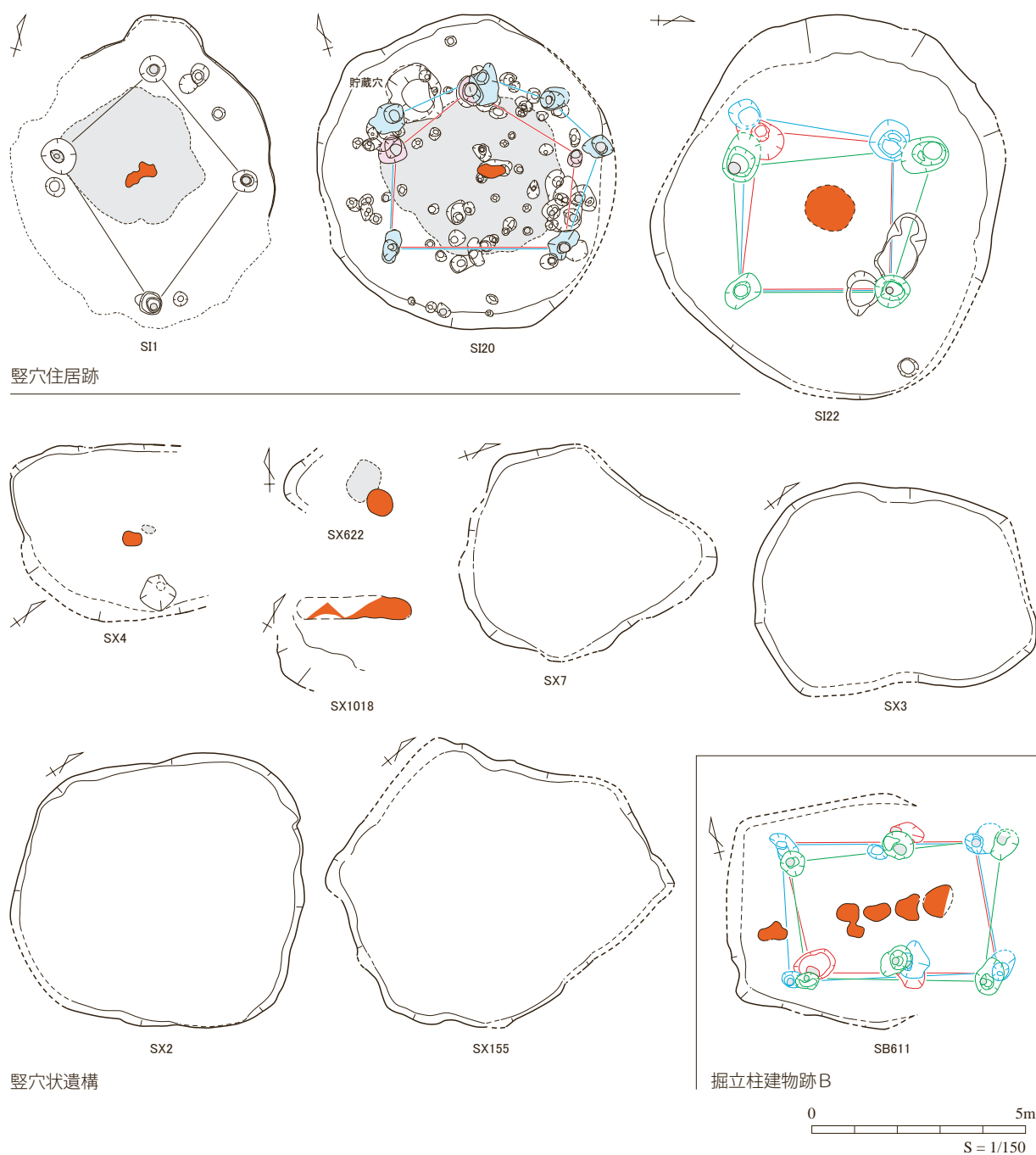
**小結** 以上のような各時期の遺構の構成から、建物の主体は2～4期にかけて平地住居形式の建物と考えられる長大な掘立柱建物から竪穴住居形式へ漸移的に移行していること、3期に配石遺構が作られ、4期には土器埋設遺構や土壇墓に類する土坑が増加すること、3～4期にかけて捨て場と考えられる遺物包含層が広範囲に形成されることが指摘できる。フラスコ状土坑は2～4期を通して安定的に構築され続けた遺構と言える。

## 2. 遺構の規模と特徴

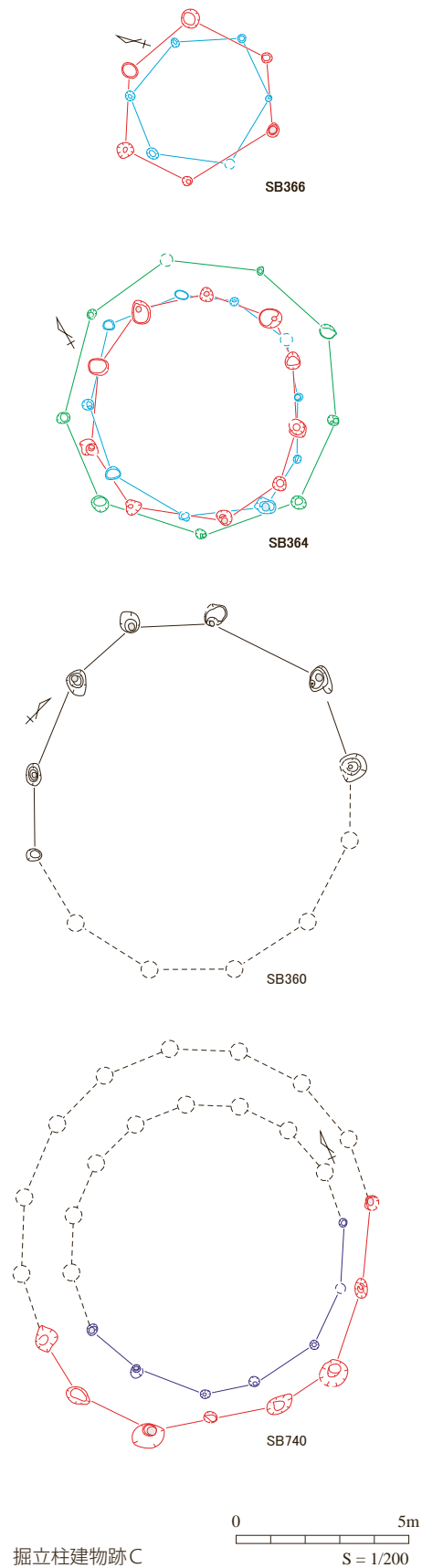
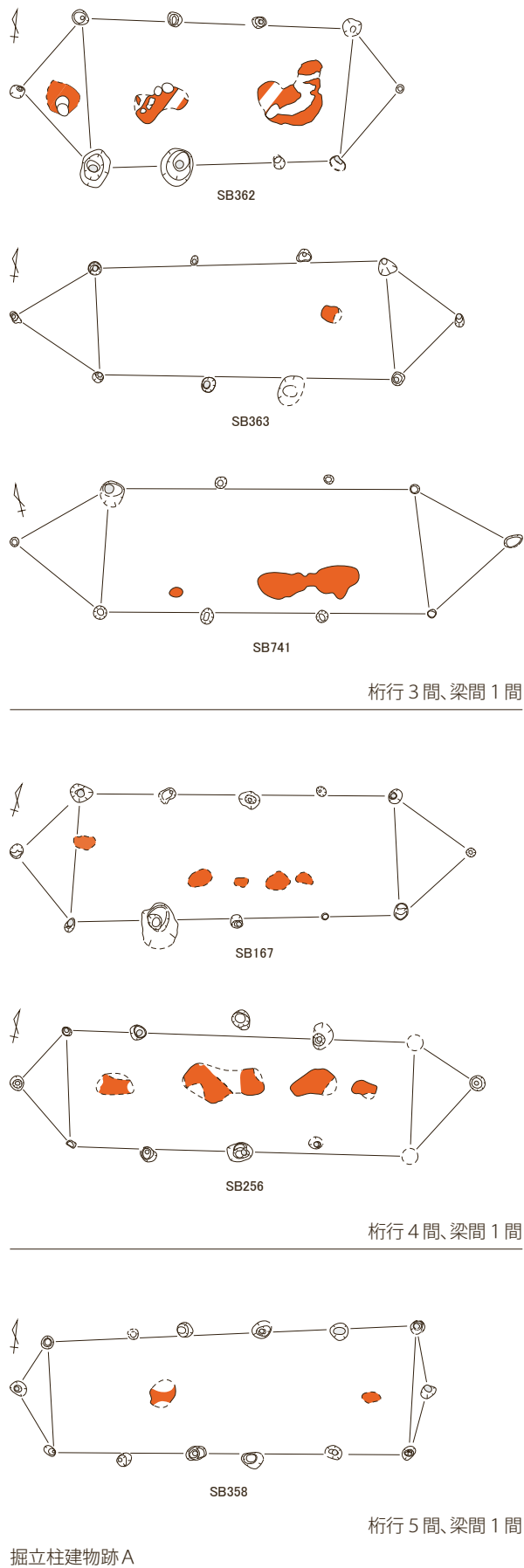
**住居・建物跡の特徴**（第2・3図） 竪穴住居跡は3軒確認した（SI1・20・22）。平面形が円形基調の掘方を持ち、張り出し部を持つもの（SI1）がある。床面には主柱穴より内側を中心に硬化面を形成する（SI1・20）。床面の中央に地床炉を配置するが、石組を持たない簡易な構造で、床面積が大きなSI22住居跡を除いては、規模もごく小さい。主柱穴の配置は4本柱からなる方形（SI22）、菱形（SI1）、5本柱からなる五角形（SI20）などが見られ、3軒でそれぞれ異なる配置となっている。柱痕跡を確認したものでは径20cm前後が主体である。主柱穴の組み合わせが複数確認できるもの（SI20・22）があり建て替えも見られることから、半恒久的に維持された施設であることが窺える。SI1住居跡では主柱穴に近い位置に小柱穴を配している。SI20住居跡では柱間が広く取られている南側が出入口と考えられ、対向する北側には小型の貯蔵穴を配置する。また、組み合わせ不明な小柱穴が65基あり、主柱穴の周囲に集中する傾向が見られるが、散在するものも多い。

竪穴状遺構は部分的なものを含めて 10 基確認した。柱穴を持たない竪穴状の掘り込みで、平面形が円形に近いものと不整形のものがある。多くは床面に何らの施設を持たず、硬化面も形成していないが、地床炉を持つものがあることから柱穴を持たない簡易な竪穴住居であると考えられる。地床炉は竪穴住居跡に似た小規模なもの（SX4・622）、掘立柱建物跡 A に似た細長いもの（SX1018）が見られる。

掘立柱建物跡 A は縦長の六角形（亀甲形）に柱穴を配置する。6 棟確認した。桁行 3～5 間、梁間 1 間で両妻の側柱外に棟持柱を配置する建物と考えられる。各隅柱を基準とした時に側柱列の柱通りが良いのは SB362・167 と SB741 南側柱列で、これ以外では柱 1～2 本分程度の凹凸がある。遺構の重複などにより柱穴の遺存状態は一様でないが、柱痕跡を確認したものでは径 20cm 前後が主体である。建物内の床面で建物の長軸方向に線状に並ぶ複数の地床炉を確認した。建物中軸線（棟持柱間）に並ぶもの（SB362・363・256・358）と、



第 2 図 遺構集成図 (1) 竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡 B



第3図 遺構集成図(2) 掘立柱建物跡A・C



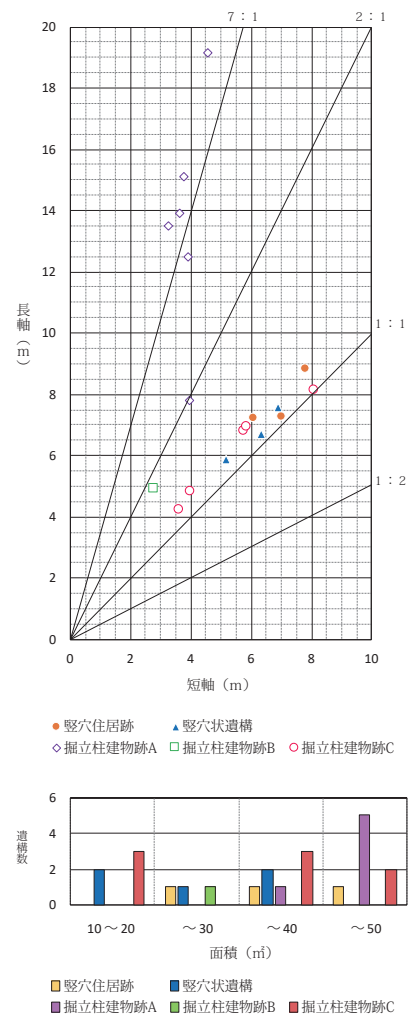
側柱列に近い位置に並ぶもの（SB167・741）が見られる。いずれも周囲に床面の硬化は確認されなかった。これに伴う竪穴状の掘り込みは明確には確認されず、周溝も確認していない。地床炉を伴うことからいわゆる平地住居形式の建物と考えられるが、構造の面では柱穴の形態と配置がやや不揃いであること、痕跡の面では竪穴住居に見られるような床面の硬化が認められないことから、大型の仮設的な建物とも考えられる。

掘立柱建物跡 B は長方形に柱穴を配置する。1 棟確認した（SB611）。桁行 2 間、梁間 1 間で柱穴の組み合わせが 3 組あり建て替えが行なわれている。各隅柱を基準とした時に側柱列の柱通りは柱 1 ～ 2 本分程度の凹凸がある。柱痕跡を確認したものでは径 25cm 前後が主体である。部分的に竪穴状の掘り込みを行なって平坦面を造成し床面としており、建物の長軸方向に線状に並ぶ複数の地床炉を確認した。周囲の床面には明瞭な硬化面は確認されない。地床炉を線状に配置する点では掘立柱建物跡 A との機能的共通性が窺えるが、規模はやや小さい。平坦面を造成していることや同位置での建て替えが行なわれていることから仮設的な建物ではなく、竪穴住居と同程度に半恒久的に維持された施設と考えられる。

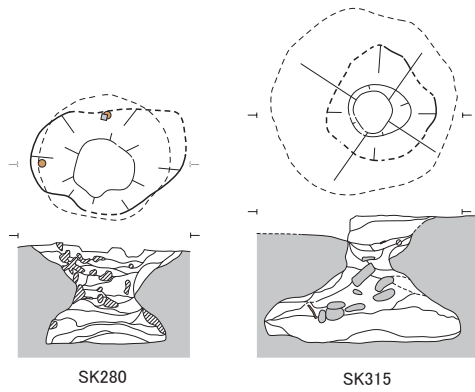
掘立柱建物跡 C は環状に柱穴を配置する。4 棟確認した（SB360・364・366・740）。SB366 建物跡は柱穴 6 基、SB364 建物跡は柱穴 10 基を環状に配置し、その各柱間に小柱穴を配する。柱痕跡を確認したものでは径 20cm 前後である。SB364 建物跡ではさらに外側に 9 基の柱穴を配置するとみられる。SB360・740 建物跡は残存部を反転復元した場合、それぞれ 12 基、16 基の柱穴を環状に配置する大型の構造を持つと推定される。柱痕跡を確認したものでは SB360 建物跡で径 20cm 前後、SB740 建物跡で径 25cm 前後である。また、SB740 建物跡では各柱穴に対応する位置の内側に小柱穴を配する。これらの性格については、後述の規模と合わせて検討する。

**住居・建物跡の規模（第4図）** 竪穴住居跡は、住居掘方の平面形が長軸約 7.2 ～ 8.9m の円形基調で、面積 26.6 ～ 47.7㎡の規模である。柱穴を持たない竪穴住居の可能性が考えられる竪穴状遺構は平面形が長軸 5.9 ～ 7.6m の円形基調で、面積 18.0 ～ 32.6㎡と竪穴住居跡よりもやや規模が小さい。平地住居形式の建物と考えられる掘立柱建物跡 A は柱穴配置の平面形が長さ 7.8 ～ 9.2m、幅 3.3 ～ 4.6m の縦長六角形で、面積 38.8 ～ 48.3㎡の規模である。平地住居と竪穴住居の折衷的な構造を持つ掘立柱建物跡 B は長さ 4.95m、幅 2.8m の長方形で、面積 22.6㎡と竪穴住居跡と同程度の規模である。環状に柱穴を配置する掘立柱建物跡 C は長軸 4.3 ～ 13.0m の円形基調で、面積 10.8 ～ 47.5㎡である。

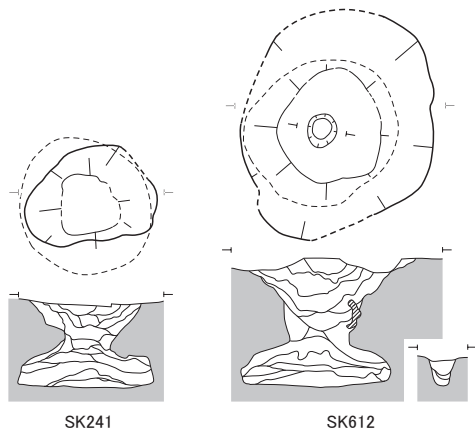
竪穴住居跡の遺構規模は概ね床面積に対応すると考えられるが、掘立柱建物跡については床面の範囲が不明瞭なため正確な規模を把握できない。竪穴住居跡における柱穴配置と住居掘方の関係を参考にすれば、床面積は柱穴配置が示す規模の概ね 1.5 ～ 2 倍程度であり、掘立柱建物跡 A は竪穴住居の 2 倍程度の規模を持つ施設であった可能性がある。部分的に竪穴状の構造を持つ掘立柱建物跡 B は、規模が小さく柱穴配置も棟持柱を持つ亀甲形の掘立柱建物跡 A とは異なることから、基本的には竪穴住居の一種と考えられる。掘立柱建物跡 C は環状に柱穴を配置するもので、規模に大小があり、床面は不明である。径 4m 前後の SB366 建物跡、径 6 ～ 8m の SB364 建物跡は構造に共通性があり、竪穴住居



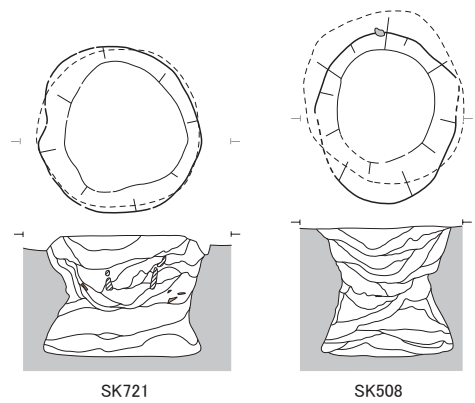
第4図 建物遺構の規模



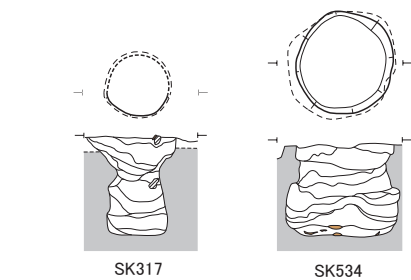
a. 1 類：三角フラスコ形



b. 2 類：スタンプ形

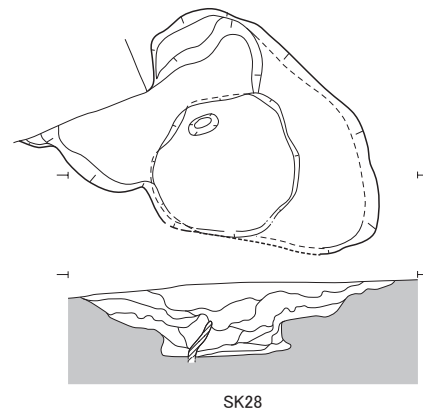
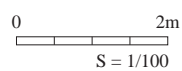


c. 3 類：鼓形

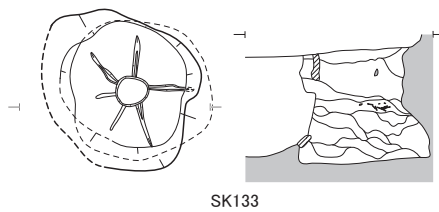


d. 4 類：ビーカー形

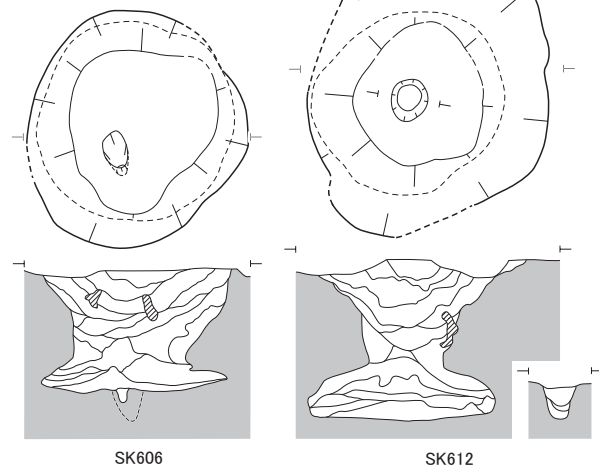
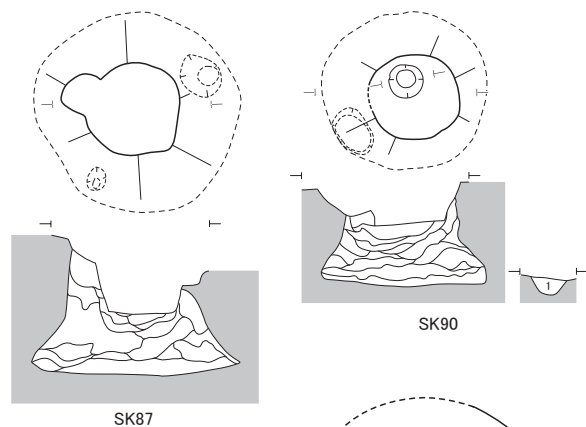
1. フラスコ状土坑の形態分類



a. テラス状の開口部・底面ピット

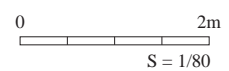


b. 底面ピット・放射状小溝



c. 底面ピット

2. フラスコ状土坑の付属施設



第5図 遺構集成図 (3) フラスコ状土坑の形態と付属施設

跡における主柱穴配置の規模とも重複することから掘立柱建物跡もしくは竪穴住居跡の壁・床面を消失したものと考えられる。SB360・740 建物跡については残存部から推定復元した場合、径 10～11m の規模となる可能性があり、建物としての上部構造を持たない環状木柱列の可能性を含め類例の増加を待って検討を加える必要があると考えられる。

**フラスコ状土坑の特徴**(第 5 図) フラスコ状土坑は 56 基確認した。平面形が円形を基調とする深型の土坑で、壁面の中位で括れ下部が袋状に広がる。主に袋状部分の形態によりいくつかに分類でき、1 類：中位で大きく括れ袋状部分の断面形が三角形に近い三角フラスコ形(23 基)、2 類：やや下位

で大きく括れ袋状部分が扁平なスタンプ形(8 基)、3 類：中位でやや小さく括れ袋状部分の断面形が台形に近い鼓形(12 基)、4 類：上位で小さく括れ袋状部分の断面形が U 字形に近いビーカー形(9 基)がある(第 5 図 1, 第 3 表)。時期別および容量別に見ると、概ね全体の傾向と一致しており、明らかな偏在性は認められない。多くの土坑では壁面の括れ部が基本層Ⅳ層ないしはⅦ層に位置しており、1 類と 2 類に見られる括れ部の高さの違いは掘削場所の土質との関係が考えられる。また、SK723 土坑では埋没過程で 1 類の括れ部が崩落して 3 類に近い形状に変形していることが確認でき、SK40・592・606 土坑でもこれに近い堆積状況が観察されることから、1 類は壁面の崩落が起こりやすい形態であることが分かる。これ以外にも使用中に崩落し、崩落土が除去された場合もあったと考えられ、3・4 類は 1 類の崩落による変形を経たものとも考えられる。

付属施設として、テラス状の開口部を持つもの(SK28)、底面にピット状の凹部と放射状の小溝を持つもの(SK133)、底面にピット状の凹部を持つもの(SK28・87・90・606・612)がある(第 5 図 2)。SK28 土坑は遺物の出土状況などから墓として転用された可能性があり、それに伴う改造とも考えられる。SK133 土坑は底面の中央に径約 30cm、深さ 13cm のピット状の凹部があり、そこから放射状に 6 条の小溝が掘られている。小溝は深さ 2cm 程度とごく浅く、土坑底面の外周側で消失することから、中央の凹部への集水溝と考えられる。これと同様に底面中央にピット状の凹部を持つ SK90・612 土坑では底面が中央の凹部に向かって皿状に窪むことから同様の目的で掘られた集水坑と考えられる。SK606 土坑では底面の中央付近にピット状の凹部が斜めに掘り込まれており、上部の開口部の壁面の傾斜と一致することから昇降のための梯子状の材を挿し込んだ可能性が考えられる。このほか、SK28・87・90 土坑では底面の外周部にピット状の凹部がある。こうした付属施設を持つものは全体から見れば 1 割程度に留まり、すべての貯蔵穴で必要とされたものではないことが分かる。

**フラスコ状土坑の規模と容量**(第 6・7 図, 第 3 表) フラスコ状土坑は、平面形が円形基調で、長軸約 1.2～2.6m 程度、面積約 1.0～2.5㎡の規模を主体に約 3.0～5.0㎡に及ぶ大型のものも少数見られる。深さは約 0.7～1.6m 程度のものが主体である。土坑は、平面形が円形基調ないしは楕円形で、長軸約 0.4～1.3m 程度、面積約 0.2～1.5㎡の規模を主体に、これを上回る大型のものも少数見られる。深さは約 0.1～0.5m 程度のものが主体である。このうち、長軸 0.7m、面積 0.5㎡、深さ 0.2m に満たない小型のものが全体の過半数を占める。

以上より、土坑の多くは面積が 1.0㎡以下で深さも 0.5m を超えるものはほとんど見られないのに対して、フラスコ状土坑は 1.0㎡以上の面積を持ち、深さ 1.0m 以上のものが多い。フラスコ状土坑はその形態に加えて面積・深さの点でも明瞭に区別されるものであるが、この違いはフラスコ状土坑の主たる機能として考えられている貯蔵施設としての容量を確保する目的から生じているものと考えられる。

フラスコ状土坑について、松本茂(2018)の方法に従って容量を算出した。この容量は、土坑の平面形のほ

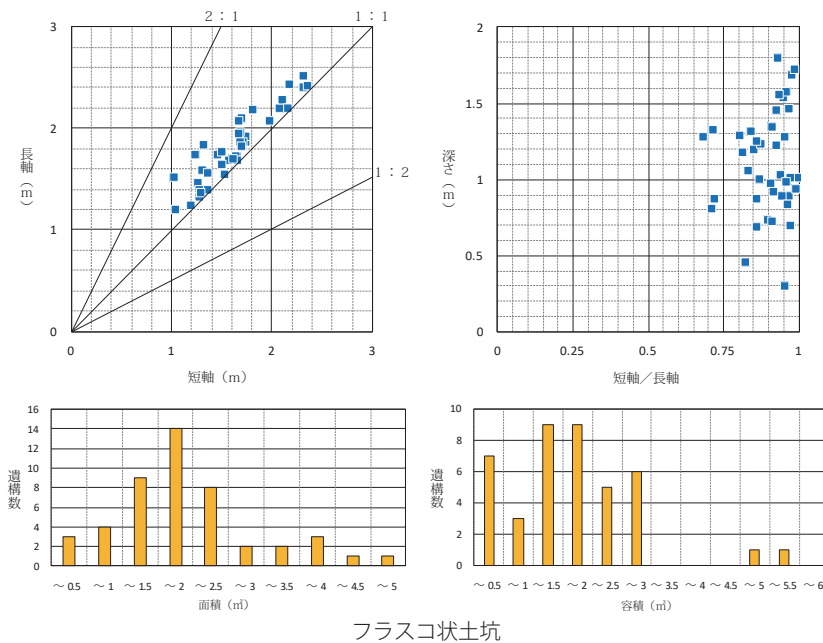
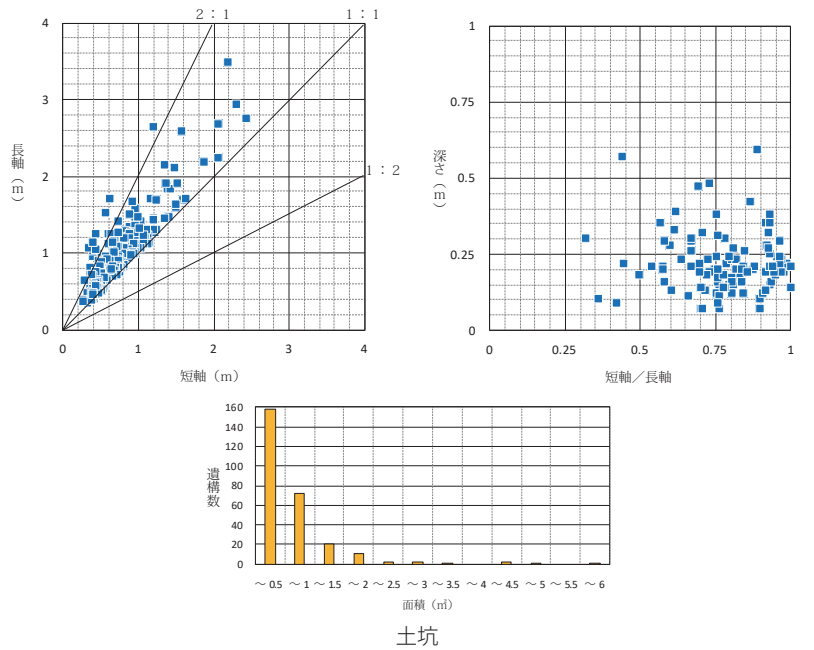
第 3 表 フラスコ状土坑の類型別出現頻度

時期	1 類	2 類	3 類	4 類	不明	総計
2 期	6	4	2	1	1	14
3 期	7	2	6	1		16
4 期	6	2	2	4	2	16
不詳	4		2	3	1	10
総計	23	8	12	9	4	56

容量	1 類	2 類	3 類	4 類	不明	総計
～1㎡	2	3	1	3	1	10
1㎡～	9	2	6	2	1	20
2㎡～	6		3	2	2	13
3㎡～	1			1		2
不詳	5	3	2	1		11
総計	23	8	12	9	4	56

# 第5章 考古学的考察

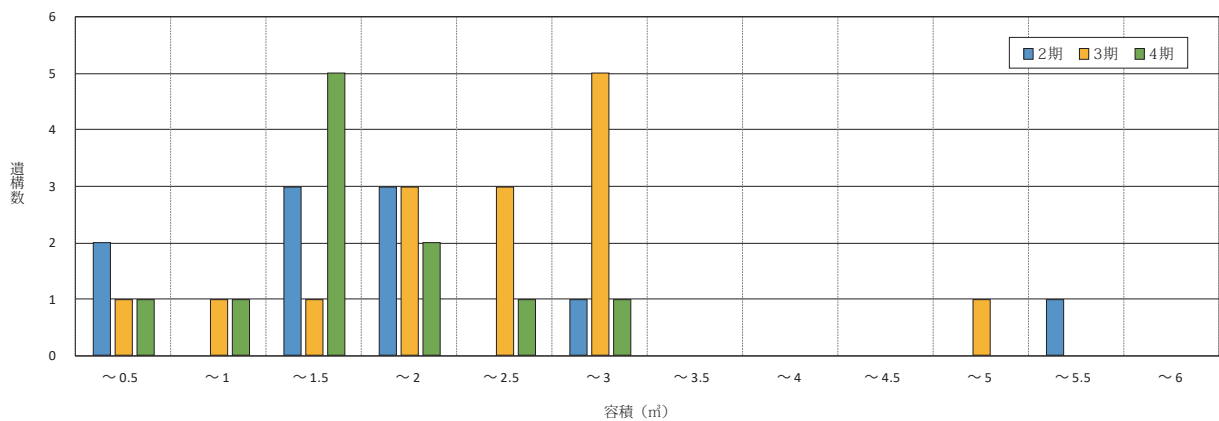


第6図 フラスコ状土坑・土坑の規模

第4表  
フラスコ状土坑の容量

機能 時期	遺構名	容量 (ml)
2期	SK191	0.30
	SK321	0.33
	SK265	1.05
	SK244	1.21
	SK242	1.38
	SK534	1.64
	SK241	1.71
	SK280	1.73
	SK315	2.72
	SK723	5.30
	SK266	-
	SK268	-
	SK276	-
3期	SK292	-
	総容量	17.37
	平均	1.74
	SK196	0.39
	SK282	0.77
	SK90	1.43
	SK122	1.62
	SK116	1.68
	SK41	1.75
	SK267	2.05
	SK262	2.24
	SK123	2.49
	SK126	2.61
	SK606	2.70
	SK87	2.70
	SK612	2.82
	SK108	2.97
	SK721	4.54
	SK134	-
	総容量	32.75
	平均	2.18
4期	SK1006	0.26
	SK133	0.99
	SK40	1.19
	SK91	1.21
	SK274	1.29
	SK214	1.36
	SK28	1.37
	SK43	1.64
	SK369	1.98
	SK83	2.02
	SK508	2.97
	SK206	-
	総容量	16.28
	平均	1.48

※推定復元値を含む。「-」は算出不能。



第7図 フラスコ状土坑の時期別容量分布



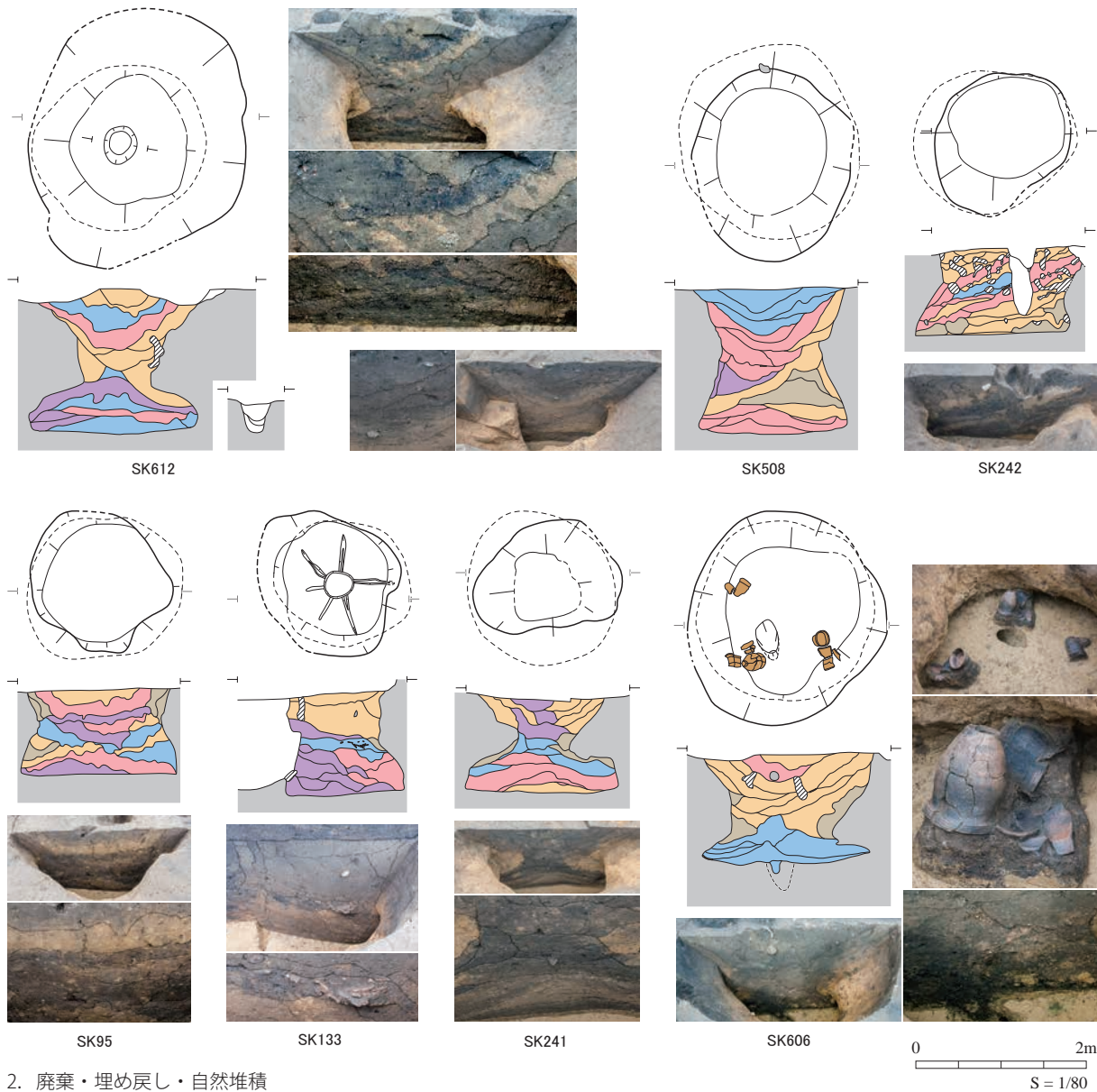
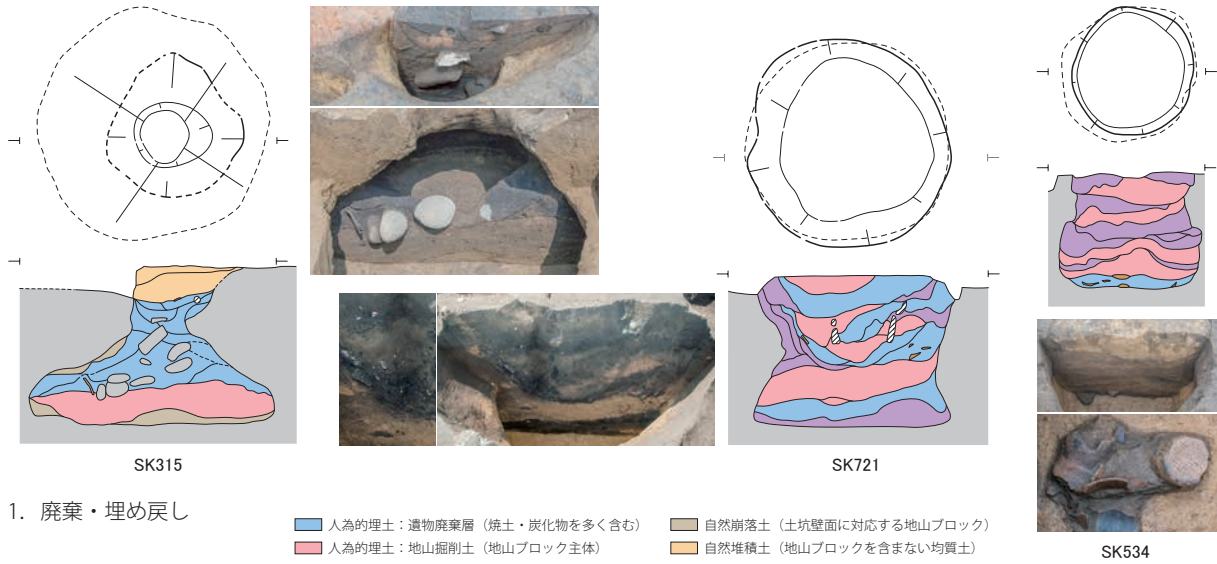
ば中心を通る軸線の断面形で括れ部と袋状の張り出し部の面積がほぼ均等となる垂直方向の補助線を設定し、二本の補助線の間を直径、原則検出面から底面までを深さとした時の円筒形の体積を求めることで算出した参考値である。廃絶後の埋没過程での壁面の崩落など、機能時の形状と調査時の形状には差異が生じていることが想定されるが、これを正確に算定することは困難であり、また貯蔵容器の有無など具体的な貯蔵方法も不明であることから、算出した遺構の容量が実際の貯蔵容量を直接的に示すものではない。しかし、各土坑の規模を時期別あるいは遺跡間で比較する上では、単純な寸法の大小よりも貯蔵施設としての機能に即した規模を示す数値として有効な指標になると考えられる。

容量が算出できたフラスコ状土坑は56基のうち45基で、約0.3～5.3m<sup>3</sup>まで幅を持って分布するが、このうち3.0m<sup>3</sup>を超える土坑は2基のみであり、1.0～2.0m<sup>3</sup>の土坑が主体である(第7図)。このうち機能時期が推定できた36基を時期別に見ると(第7図)、2・4期には1.0～2.0m<sup>3</sup>、3期には1.5～3.0m<sup>3</sup>の土坑が主体になっており、3期にやや大型の土坑が目立つ傾向が認められる。また、2・3期には4.5m<sup>3</sup>を超える超大型の土坑が各1基ある。各土坑の容量を集計した時期別の総容量(第4表)を見ると、2期は17.37m<sup>3</sup>、3期は32.75m<sup>3</sup>、4期は16.28m<sup>3</sup>となっている。2期には容量が不明な土坑が複数あるが、これを加味しても3期が突出しており、平均値でもやや大型の傾向を示す。調査範囲の制約があり、また各時期の時間幅は不明であるものの、3期には貯蔵穴がやや大型化して集落全体の貯蔵量も多く、4期には小型化するとともに集落全体の貯蔵量も少なくなった可能性が考えられる。

**フラスコ状土坑の埋没過程**(第8・9図) フラスコ状土坑は確認した遺構の中で突出して掘削深度の深い遺構であり、多様な埋没過程が観察された。確認した堆積土の性状は周囲からの流れ込みによる自然堆積土、壁面の崩落土、人為的埋土に大別される。自然堆積土は基本的にロームブロックなどを含まず均質な土層、壁面の崩落土は土坑壁面の基本層に対応するロームブロックなどを主体とする土層である。人為的埋土はこれら以外のロームブロックや焼土・炭化物などを多く含む不安定な土層で、ロームブロックを主体とする地山掘削土、ロームブロック混じりの地山攪拌土、焼土・炭化物と遺物を多く含む遺物廃棄層に細別が可能である。地山掘削土・攪拌土は近接する遺構の掘削土が廃棄されたもので、地山掘削土は下層部分、地山攪拌土は上層部分の掘削によるものと考えられ、比較的深部のロームブロックを含むことからフラスコ状土坑の掘削に伴うものである可能性が高い。遺物廃棄層は黒色～黒褐色を帯び、有機質遺物を多く含んでいた可能性が高い。

堆積土の分類から見た埋没過程は、1類：遺物廃棄・埋め戻し(第8図1)、2類：遺物廃棄・埋め戻し・自然堆積(第8図2、第9図1)、3類：埋め戻し(第9図2)、4類：遺物廃棄・自然堆積(第9図3)の4パターンに大別され、大多数は2類に分類される。各パターンにおける遺物廃棄と埋め戻しなどの行為の前後関係や回数はさらに多様で、1類においては下部の埋め戻し後に上部まで遺物廃棄層が形成されるもの(SK315)、下部に遺物廃棄層を形成した後、上部まで埋め戻されるもの(SK534)、埋め戻しと遺物廃棄を交互に繰り返すもの(SK721)がある。2類においては下部に埋め戻し・遺物廃棄層を形成した後に自然堆積を挟み、上部に再び埋め戻し・遺物廃棄層を形成するもの(SK95・612)、下部の埋め戻し後に自然堆積を挟み、上部に再び埋め戻しの後で遺物廃棄層を形成するもの(SK508)、下部が自然堆積によって埋没した後で埋め戻し・遺物廃棄層を形成し、上部が再び自然堆積によって埋没するもの(SK241・242・274)、下部に埋め戻し・遺物廃棄層を形成した後、上部が自然堆積によって埋没するもの(SK41・133・280・723)、下部に遺物廃棄層を形成した後、上部が自然堆積によって埋没するもの(SK606)がある。遺物廃棄層と埋め戻しの前後関係に規則性はなく、遺物廃棄層を埋め戻し土で被覆する意図は必ずしも認められないことから、不要になった土坑が遺物および掘削土の捨て場として利用されたと考えられる。

壁面の崩落は、主に庇状の張り出しとなる括れ部の崩壊によって生じている。前後に自然堆積を伴うものが多く(SK41・95・242・280・508・592・606・723)、廃絶した土坑が開放状態で放置された場合に乾燥や

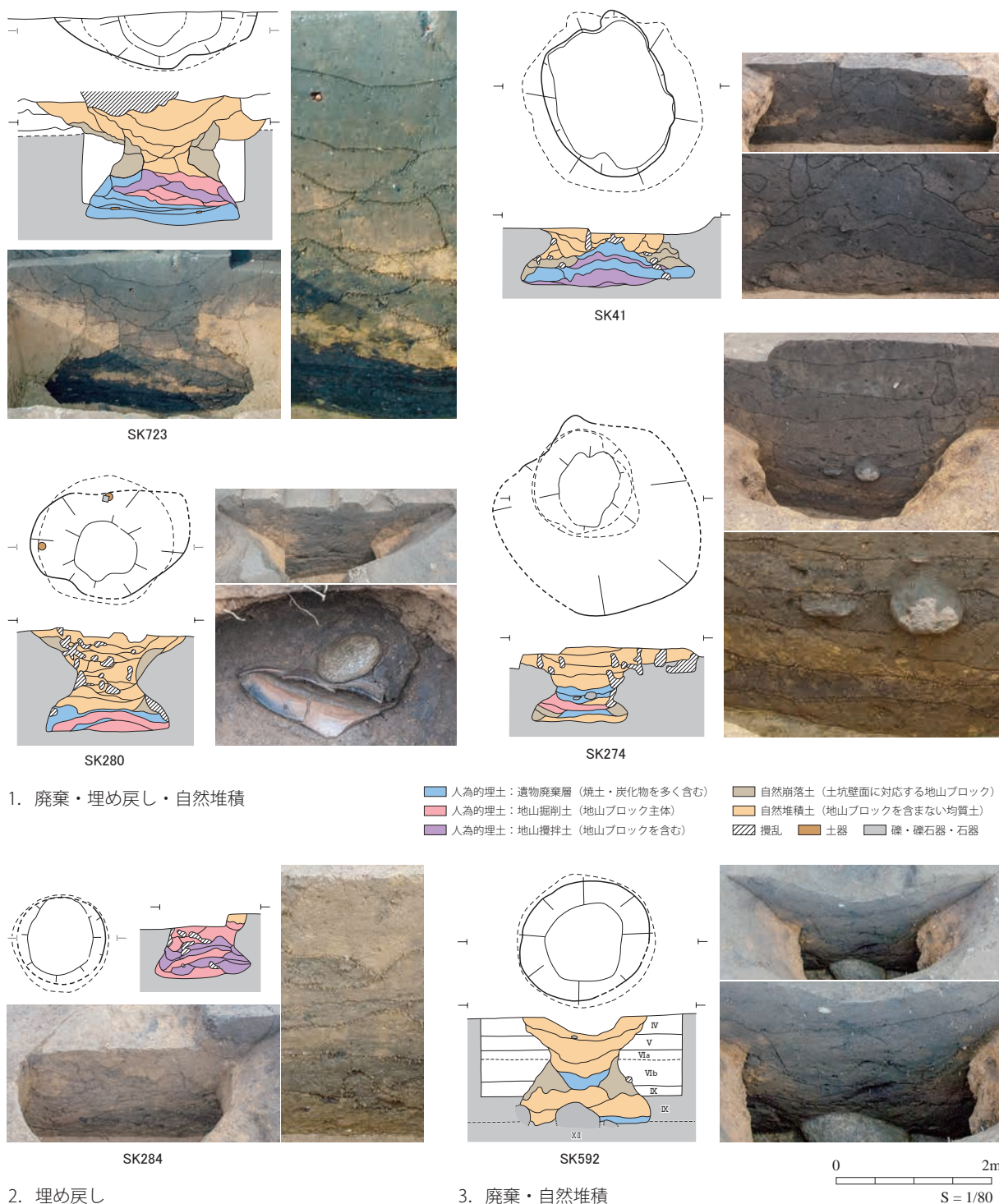


第8図 遺構集成図(4) フラスコ状土坑の埋没パターン(1)



雨水の影響によって生じたと考えられる。このことから、フラスコ状土坑は機能時には少なくとも上部が閉塞された状態で管理されていたことが確実である。

また、土坑の上部にまとまった自然堆積層を形成するものが2・4期の土坑に多く見られる。調査区外を含めた集落内の空間利用などと合わせて検討する必要があるが、2期の土坑における自然埋没は、2期と3期の間で集落ないしは当該土坑周辺での活動が低調となった期間の存在を示す可能性がある。また、4期の土坑における自然埋没は、本集落の廃絶時期に対応するものと考えられる。



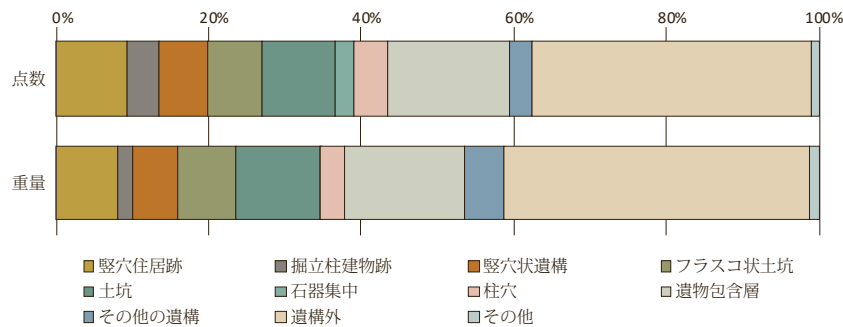
第9図 遺構集成図 (5) フラスコ状土坑の埋没パターン (2)

第5章 考古学的考察

3. 遺物の出土状況

**出土遺物の性格** 遺構種別の遺物出土状況（第10図・第5表）を見ると、点数比で遺構外が約4割、遺物包含層が約2割弱あり、集落内の特定の施設に関係しないものが全体の6割近くを占める。集落内施設に関するものでは、竪穴住居跡、竪穴状遺構、フラスコ状土坑、土坑が各1割前後となっている。重量比では遺構外の比率がやや大きく、掘立柱建物跡や柱穴の比率が小さくなっている。これは、遺構外出土遺物に残存率の高い縄文土器や大型の礫石器が多く、掘立柱建物跡や柱穴の出土遺物は縄文土器の小破片や石器など小型の遺物が主体であることによる。

前節までの出土遺物の検討でも既述の通り、これらの遺構出土遺物で使用時かそれに近い状態を指標する住居床面や土坑底面に伴うものは少なく、土器埋設遺構や配石遺構、石器集中など一部の遺構を除いて、殆どが廃絶後の堆積土からの出土である。これらの中には比較的まとまった出土状況を示し、遺物包含層や遺構外と比較してある程度時間的に限定された遺物群として把握できるものがあるが、だからと言って特定の生活行動を反映したような出土状況や組成を示すものではなく、主に廃絶遺構の凹地における堆積環境に起因するものと考えられる。出土状況から把握される遺物の性格としては、本遺跡出土遺物の殆どが製作・使用場所から移動されて意識的に廃棄された物であり、集落内で発生した生活残滓と考えられる。



第10図 遺構種別遺物出土状況

第5表 遺構種別遺物出土状況

(重量: g)

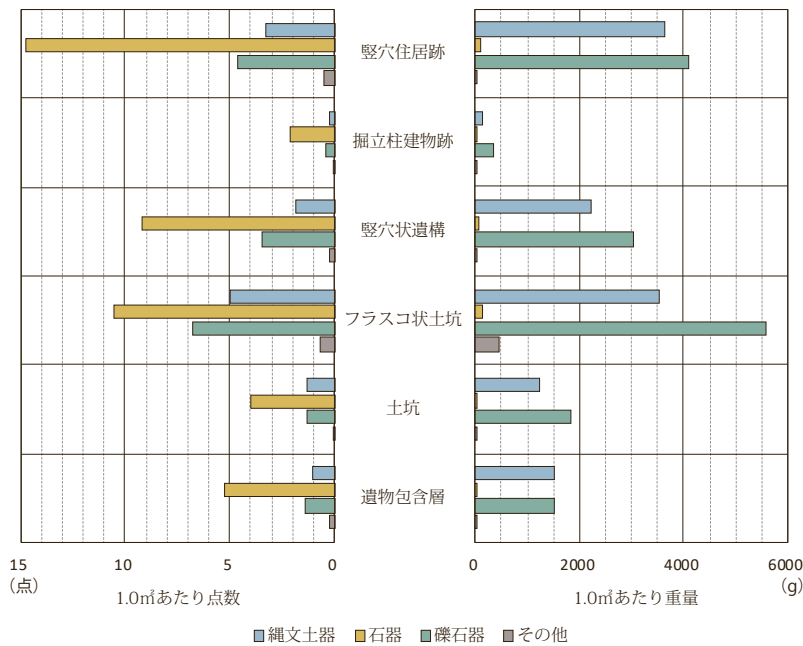
	縄文土器		土製品		焼成粘土塊		石器		礫石器		石製品		合計	
	点数 <sup>*1</sup>	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
竪穴住居跡	271	297980	31	1827.8	7	109	1207	10315.7	379	336379	1	87	1896	646698.5
掘立柱建物跡	62	40330	6	64.9	4	48.5	622	5859.5	126	104192	0	0	820	150494.9
炉跡	8	5060	0	0	1	5.3	70	478.2	17	14449	0	0	96	19992.5
竪穴状遺構	158	193700	13	646.6	6	402.3	803	6724.91	300	266410	4	2037.3	1284	469921.11
フラスコ状土坑	316	225650	21	685.5	6	285.3	670	9167.9	432	356009	14	28846.5	1459	620644.2
落とし穴状土坑	2	4300	0	0	0	0	28	238.9	9	3170	0	0	39	7708.9
土坑	375	344170	18	392.5	5	61.8	1125	10782	370	518816	5	1601	1898	875823.3
溝跡	9	20630	6	84.4	0	0	131	1508.4	43	29523	0	0	189	51745.8
配石遺構	16	18450	0	0	0	0	16	162	39	197841	1	857	72	217310
土器埋設遺構	15	19780	0	0	0	0	32	176.6	6	24614	1	0.5	54	44571.1
遺物集中	19	20000	0	0	0	0	12	188.3	9	6891	0	0	40	27079.3
石器集中 <sup>*2</sup>	0	300	0	0	1	4	534	2817.5	0	0	0	0	535	3121.5
焼土集積	14	7040	2	187	0	0	66	746.6	15	33852	0	0	97	41825.6
柱穴	34	99710	12	395.6	8	154.9	661	8897.6	168	108251	6	29266.4	889	246675.5
遺物包含層	437	607950	40	1917.8	28	728.6	2116	17772	551	608062	13	17423.3	3185	1253853.7
遺構外	310	1064565	139	4628.9	31	332.4	4971	49645.73	1923	2060945	27	19308.7	7401	3199425.73
その他	0	60	4	42	0	0	152	1877.9	47	98609	0	0	203	100588.9
総計	2046	2969675	292	10873	97	2132.1	13216	127359.74	4434	4768013	72	99427.7	20157	7977480.54

\*1 縄文土器の出土点数は把握していないため抽出登録数の集計値である。\*2 石器集中の石器のうち破片（5990点・635.3g）は上記の集計から除外している。

**竪穴と廃棄** 遺構種別に見た単位面積当たりの遺物分布密度（第 11 図・第 6 表）では、竪穴住居跡、竪穴状遺構、フラスコ状土坑で密度が高くなっている。遺物包含層では多量の遺物が出土しているが、広範囲に形成されているため密度としてはそれほど高くない。フラスコ状土坑は貯蔵穴として深く掘り込まれる性格上、面積に対して容積が大きいことから堆積土量に比例して遺物の密度も高くなっている。複数の廃棄層を形成するものも多く、埋没過程における容積率の高い遺構と言える。こうして見ると、竪穴住居跡と竪穴状遺構の密度は突出していると言え、集落内で廃絶住居の凹地が廃棄場所として選択的に利用されたことを示している。廃棄される遺物は残存率の高い縄文土器や大型品を含む礫石器が量的主体である。石器は重量にすると微々たる量であるが、点数で見ると突出しており、この場所へ意識的に持ち込まれ廃棄されていることが分かる。

フラスコ状土坑では複数の廃棄層の間に人為的埋土が介在するものが多く、廃棄行動と埋め戻しが比較的短期間に繰り返されて埋没するのに対して、竪穴住居跡や竪穴状遺構では埋め戻しの痕跡はほとんど見られず、廃絶住居の凹地は埋没までの一定期間、廃棄場所として集落内の空間利用に組み込まれていたと考えられる。

**廃棄遺物に見る諸活動** これらの廃棄遺物には、具体的には前節までの検討で明らかにした通り、使用の痕跡を留める土器のほか、土器・土偶の製作に伴う焼成事故品（第 3・8 節）、破損ないしは刃部再生により損耗した石器や転用により損耗した礫石器（第 5 節）、人為的な加撃によって破断した石棒（第 7 節）などを含んでおり、個々の遺物の検討によって集落内における諸活動のある程度復元することが可能である。



第 11 図 主要遺構種別遺物分布密度

第 6 表 主要遺構種別遺物分布密度

(重量：g)

1㎡あたり 点数／重量	縄文土器		石器		礫石器		その他		合計	
	点数*	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
竪穴住居跡	3.3	3641.9	14.8	126.1	4.6	4111.2	0.5	24.7	23.2	7903.9
掘立柱建物跡	0.2	137.7	2.1	20.0	0.4	355.7	0.0	0.4	2.8	513.8
竪穴状遺構	1.8	2219.8	9.2	77.1	3.4	3053.1	0.3	35.4	14.7	5385.3
フラスコ状土坑	5.0	3546.3	10.5	144.1	6.8	5595.0	0.6	468.6	22.9	9754.0
土坑	1.3	1230.3	4.0	38.5	1.3	1854.6	0.1	7.3	6.8	3130.8
遺物包含層	1.1	1512.2	5.3	44.2	1.4	1512.4	0.2	49.9	7.9	3118.7
平均	2.1	2048.0	7.6	75.0	3.0	2747.0	0.3	97.7	13.1	4967.8

\* 縄文土器の出土点数は把握していないため抽出登録数の集計値である。



#### 4. 遺跡の立地と集落構成

**遺跡の立地** 本遺跡は松川左岸の矢附段丘面上の微高地に立地するが、周辺には縄文時代の遺跡が多く分布している（第12図）。北側には寺門前遺跡が隣接し、中期前半に本遺跡と同一の集落を形成した可能性が高い。西側に隣接する曲木・十文字遺跡も詳細は不明ながら中期の遺跡とされている。中期中葉には北東側にある鞘堂山・高木遺跡に集落が形成され、本遺跡より一段上位の永野段丘面上に占地した。中期後葉には北側約1.3kmの地点にある湯坂山B遺跡に集落が形成され、さらに一段上位の遠刈田段丘面上に占地した。後期前葉には東側にある西浦B遺跡に集落が形成され、再び矢附面に占地した。南西約1.5kmの地点にある鍛冶沢遺跡では後期後葉から弥生時代前期にかけての集落・墓域が形成され、青麻山東麓の埋積谷の谷底面へと大きく占地を替えている。南東約0.8～1.5kmの地点にある西浦・東浦遺跡、上野遺跡では弥生時代中期の集落・水田などが形成されたとみられ、矢附・永野面に占地を戻している。

このように、本遺跡周辺では縄文時代中期から弥生時代中期にかけて占地を替えながら集落が営まれたことが確認できる。この中で最も早い段階の本格的な集落が矢附面の本遺跡（谷地・寺門前遺跡）であり、規模も大きい。その後、中期中葉の鞘堂山・高木遺跡、中期後葉の湯坂山B遺跡と一段ずつ上位の段丘面へ占地を替え、後期前葉には再び矢附面に占地する。後期中葉は不明だが、後期後葉から弥生時代前期にかけては青麻山東麓の埋積谷へと大きく占地を替え、弥生時代中期には矢附面に占地を戻した。矢附面に立地する本遺跡は比較的大規模な拠点集落であり、上位面へ形成された集落と比較して早い段階に長期間にわたって占地されたことから居住好適地であったことが窺える。矢附面は上位面と比較して占地のための広い空間を確保できること、段丘崖下に湧水域を持ち、水場として利用可能な大小の後背湿地が発達していることなどが集落の占地において優位に働いた可能性が考えられる。

**集落構成の変遷** 上述のような立地環境にある本遺跡の発掘調査では、谷地・寺門前遺跡の中央部に調査区が設定された。調査面積は約1,590㎡であり、多数の遺構・遺物を確認しているが、遺跡全体から見ればごく一部に過ぎず、大部分が未調査であることから集落の全体像を明らかにすることは難しい。ここでは、調査区内で確認した遺構のうち、機能時期が推定できた主要な遺構の配置（第13・14図）について検討し、集落構成の変遷について予察的に考察する。確認した主要な遺構のうち、竪穴状遺構については個々の性格を明らかにできたわけではないが、竪穴住居跡と同様の地床炉を伴うものが複数見られることから、柱穴を持たない小型の住居状の建物遺構と考えておく。なお、遺構期については縄文土器の分類（第1節）で在地土器型式と対応する1期（大木6式期）、2期（大木7a式期）、3期（大木7b式期）、4期（大木8a式期）に区分し、2～4期における新旧各2時期の細分については適宜参照することとする。

1期（大木6式期）に帰属する遺構は明確には確認しておらず、本格的な集落が未形成であるか、調査区とは位置を離れた場所に集落が形成された可能性がある。

2期（大木7a式期）には本格的な集落が形成された。調査区北東側に概ね東西方向に長軸を持つ大型の亀甲形建物4棟（SB167・256・363・741）が配置され、うち2棟（SB256・363）はほぼ同位置で建て替えられている。いずれも床面に複数基の地床炉が線状に並ぶ。また、調査区北東部に二重構造の環状柱穴列（SB741）、北東部・中央北部・南東部に不整形の竪穴状遺構（SX155・510・622・1018）が配置される。SX622竪穴は床面に地床炉を伴う。貯蔵穴は、調査区北西部に容量5.30㎡と推定される大型貯蔵穴が作られた（A群：SK723）。これと離れた調査区東部には多くの貯蔵穴が分布し、重複を避けるように一定の間隔を保って近接しながら帯状に配置された（B群：SK241・280・292・315）。調査区北半部では、亀甲形建物（SB167・740）廃絶後の浅い皿状の凹地から遺構分布の希薄な南側にかけての範囲で遺物包含層の形成が始まっている。これらの遺構は建物で2～3時期、貯蔵穴で4時期の変遷が確認できる。全体として調査区北西・南東隅の対角線の東側に建物群、調査区東辺部に主たる貯蔵穴群が弧状に配置され、調査区南西部が空地として残置される

遺構配置を形成していると考えられる。

3期（大木7b式期）には、2期の遺構配置を踏襲して概ね東西方向に長軸を持つ大型の亀甲形建物が調査区中央部に配置され、同位置で建て替えられている（SB358・362）。床面には複数基の地床炉が線状に並ぶ。また、調査区中央北部に三重構造の環状柱穴列（SB364）、中央南部に竪穴住居（SI1）、南東部に竪穴状遺構（SX1008）が配置される。SI1住居跡は主柱穴が4本柱で、北壁に張り出し部があり、床面の中央に地床炉を持つ。南東部のSX1008竪穴に隣接するSK1007土坑は底面に地床炉を伴う。貯蔵穴は、引き続き調査区北西部に最大容量4.54m<sup>3</sup>の大型貯蔵穴が作られ（A群：SK721・612）、南西部にも容量2.70m<sup>3</sup>と大型の貯蔵穴1基（SK606）が作られる。これらと離れた調査区東部にも引き続き多くの貯蔵穴が分布し、重複を避けるように一定の間隔を保って近接しながら環状に配置される（C群：SK87・90・108・116・126・196・262・



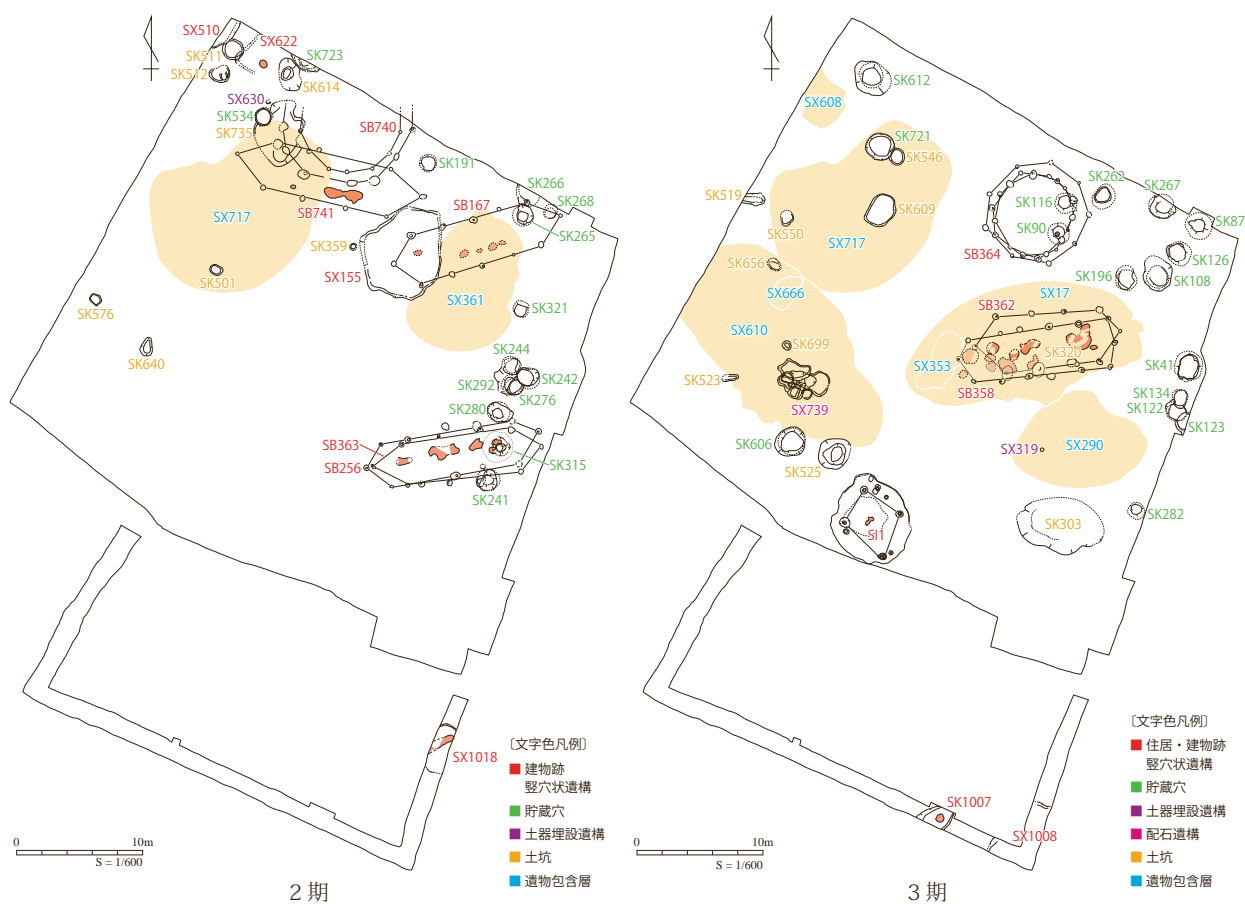
第12図 谷地遺跡の立地と周辺の縄文時代遺跡



## 第5章 考古学的考察

267)。調査区東壁際に分布する一群も同様の環状配置を採る可能性がある（D群：SK41・122・123・134）。後述の通り貯蔵穴C群は南側のSK196貯蔵穴を起点に反時計回りで順次構築され、この配置と重複するSB364環状柱穴列はSK262貯蔵穴の構築以前に機能したものと考えられる。また、調査区南壁際に位置するSI1 竪穴住居跡は出土土器から3期の中でも新しく、SB364の廃絶と前後する時期に構築された可能性がある。遺物包含層は2期から継続するSX717包含層のほか、南側に隣接するSX610包含層や亀甲形建物（SB363・256、SB358・362）廃絶後の浅い皿状の凹地（SX290、SX17）など調査区中央部へ範囲を拡大させながら継続して形成されており、配石遺構も形成されている（SX739）。これらの遺構は建物で2時期、貯蔵穴で3時期の変遷が確認できる。全体として調査区北西・南東隅の対角線に近い位置に住居・建物群、調査区北東部に主たる貯蔵穴群が配置され、調査区南西部が施設配置の疎らな空闲地として残置される遺構配置を維持していると考えられる。

4期（大木8a式期）になると、亀甲形建物が作られなくなり、竪穴住居が建物の主体となる。竪穴住居跡は調査区南東部（SI20）、中央部（SI22）に2軒あり、北西部に掘立柱建物跡1棟（SB611）がある。SI20住居跡は支柱穴が5本柱で、他に小柱穴を多数確認している。SI22は支柱穴が4本柱である。いずれも床面の中央に地床炉を持つ。SB611建物跡は6本柱を長方形に配置する東西棟で、竪穴状の掘り込みを行なって平坦面を造成し、床面に複数基の地床炉が線状に並ぶ。床面に地床炉が線状に並ぶという点では2・3期の亀甲形建物と共通するが、竪穴住居と同程度まで小型化しており、部分的に竪穴状の掘り込みを伴った折衷的な構造となっている。出土土器の時期と比率から、SI20住居跡→SI22住居跡→SB611建物跡の新旧関係があるものと考えられる。また、調査区南東部に環状柱穴列（SB360）、中央部から中央頭東部に竪穴状遺構（SX2・3・4・7）

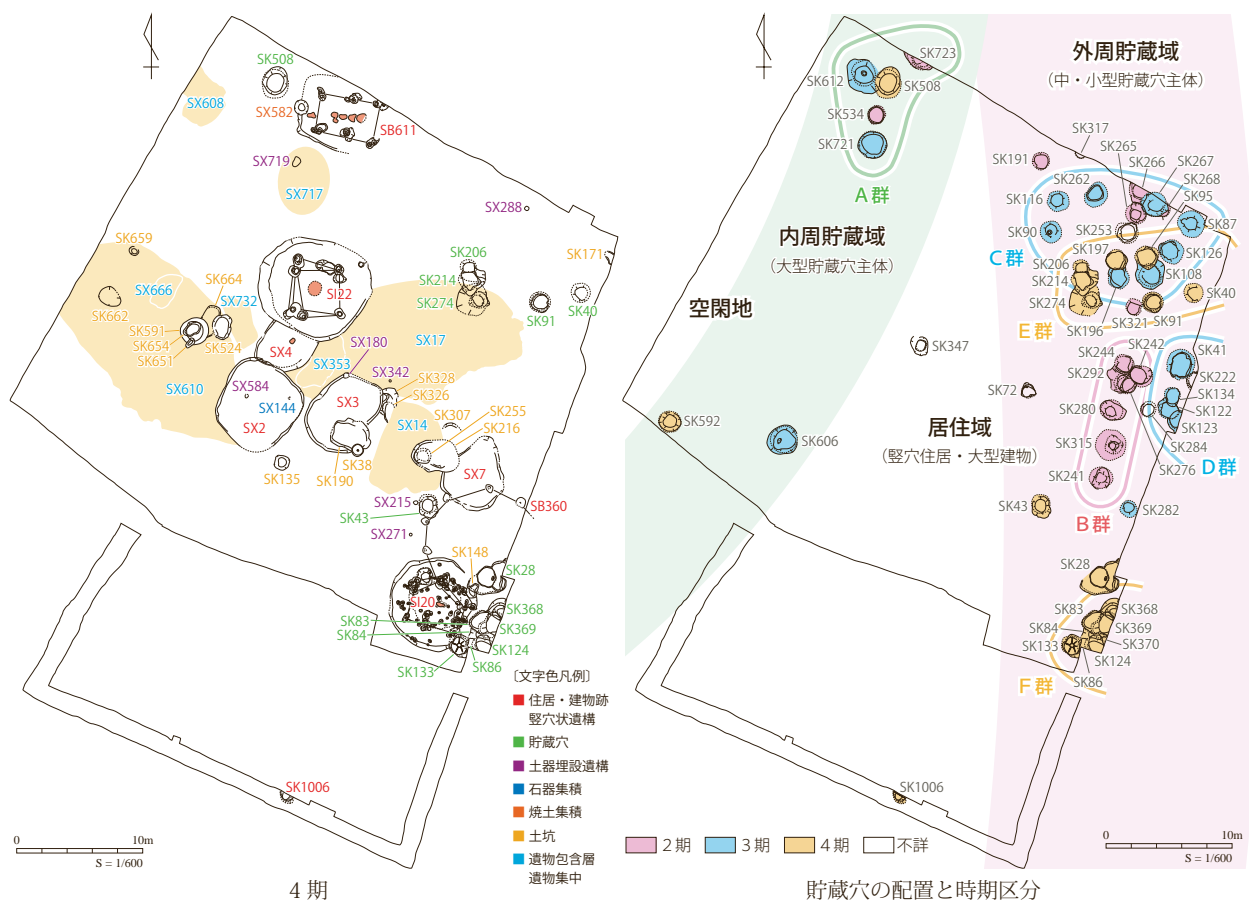


第13図 遺構配置の変遷(1)



が配置される。SX4 竪穴は SI22 住居跡より古く、床面に地床炉を伴う。これらの住居・建物群と重複する範囲に土器埋設遺構が点々と配置される。貯蔵穴は、引き続き調査区北西部に容量 2.97m<sup>3</sup>の大型貯蔵穴が作られる（A 群：SK508）。また、調査区南西部の SK592 貯蔵穴は出土遺物に乏しく機能時期が不明であるが、埋没過程で遺物の廃棄が全く行われず上層まで自然堆積していることから、本集落の最終末期に位置付けられる可能性が高い。これらと離れた調査区東部にも引き続き多くの貯蔵穴が分布し、3 期に形成された C 群の小環状配置の南西側開口部とその南側に隣接して配置される（E 群：SK40・91・214・206・274）。このことから、C 群は 3 期に SB358・362 建物跡の東端に近い SK196 貯蔵穴を起点に反時計回りに SK90 貯蔵穴までの 8 基が作られ、4 期に入り SK206 → 274 → 91 → 40 貯蔵穴の順に作られたと推定できる。また、配置と重複による新旧関係から SK95・197 貯蔵穴も E 群に帰属する可能性がある。調査区南東壁際に分布する一群は重複が著しいが、同様の小環状配置を採る可能性がある（F 群：SK83・84・86・124・133・368・369・370）。遺物包含層は SX17・610 包含層を中心に 3 期から継続して形成されるが、竪穴状遺構など遺物包含層の一部を掘削する遺構も多く見られる。また、基本層Ⅲ層中（SX732）や 3 期までの遺物包含層の剝不整合面上（SX717）にも遺物集中部を形成している。これらの遺構は建物で 3 時期、貯蔵穴で 3～4 時期の変遷が確認できる。全体として調査区北西・南東隅の対角線上中心に住居・建物群、調査区東部に主たる貯蔵穴群が配置され、調査区南西部が施設配置の疎らな空閑地として残置される遺構配置を維持していると考えられる。

**小結** 本遺跡は隣接する寺門前遺跡と一体をなす遺跡と考えられ、松川左岸の矢附段丘面上の微高地に占地した比較的大規模な集落跡である。周辺では最も早い段階の本格的な集落であり、人為的な環境改変の影響が少ない段階での居住好適地に占地した可能性が高い。今回の調査区は遺跡全体から見れば僅かな面積ではあるも



第14図 遺構配置の変遷 (2)

## 第5章 考古学的考察

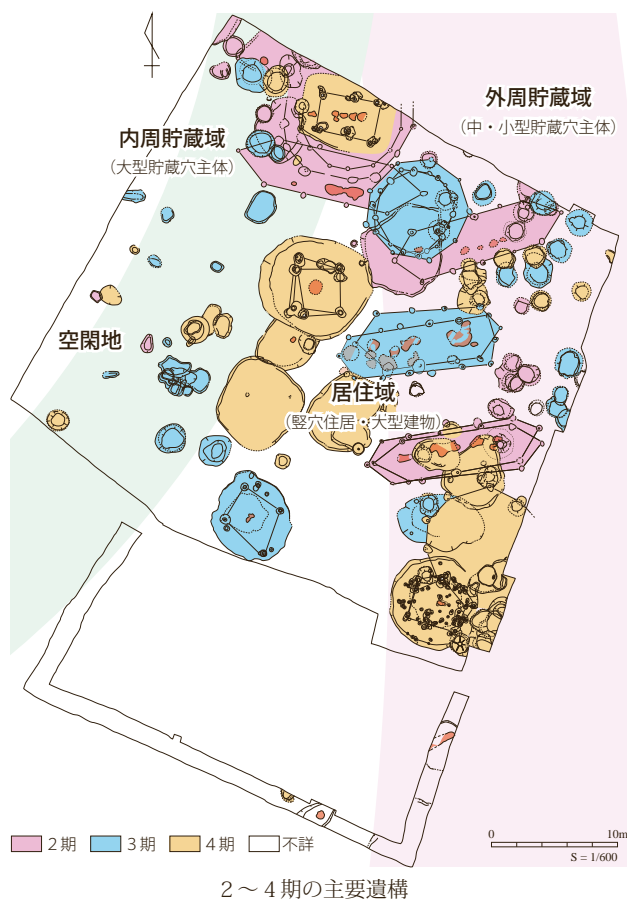
の、谷地・寺門前遺跡の中央部に設定され、確認した遺構配置から集落機能の中枢部の一角と考えられる。

調査区内の遺構の帰属時期から、本格的な集落形成は2期（大木7a式期）からと考えられ、3期（大木7b式期）、4期（大木8a式期）と大きく3段階に変遷する。2期の集落は大型の亀甲形建物を主体とし、調査区南西部の空閑地を囲むように放射状に配置されたと考えられる。この建物群の外周に帯状配置の貯蔵穴B群が配置される。3期の集落は大型の亀甲形建物から竪穴住居主体へと移行する。建物の配置は2期の放射状配置を踏襲し、竪穴住居の配置もその延長で考えられる。建物群外周の貯蔵穴群は小環状配置に変わり、C・D群が配置される。4期の集落は竪穴住居を主体とし、3期までの建物配置を踏襲する。建物群外周の貯蔵穴群は小環状配置のE・F群が配置された。建物群外周の貯蔵穴群は2期の帯状配置から3・4期の小環状配置へと変化している。七ヶ宿町小梁川遺跡（宮城県教委1986・1987）では大木6式期に帯状配置が見られ、7a式期は不明瞭だが7b式期には小環状配置に近い配置が認められ、同一の規範が共有されていた可能性がある。建物群内周の広場状の空間では、2～4期にかけて数基ずつの大型貯蔵穴からなるA群が配置され、3期には配石遺構が作られている。

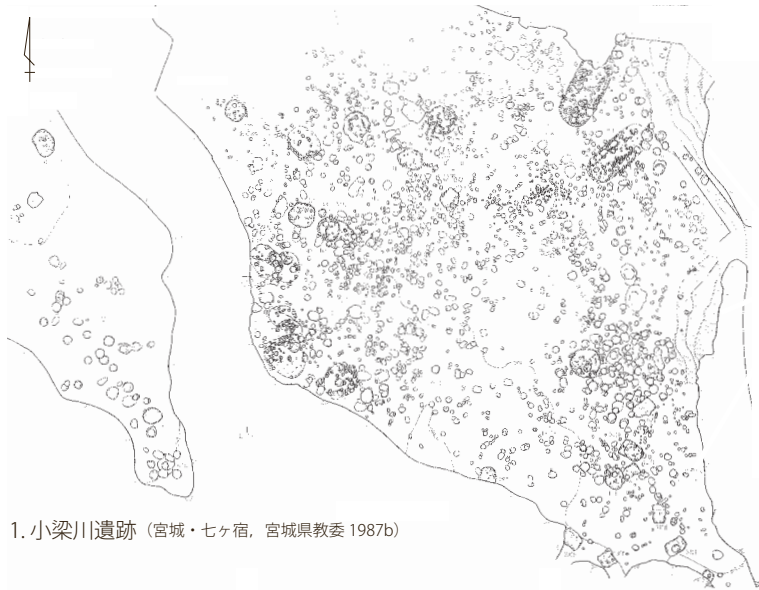
集落期を通観すると、調査区内の遺構配置は南西部に遺構分布の疎らな空閑地を持ち、これを囲むように住居・建物群が弧状（建物は放射状）に配置され、その外周に主たる貯蔵穴群が配置されることで共通する（第15図）。また、住居・建物群と重複する範囲に土器埋設遺構が点々と作られ、内周の空閑地には大型貯蔵穴や配石遺構が散在的に配置されている。このような遺構配置の集落は川崎町中ノ内A遺跡（宮城県教委1987a）、七ヶ宿町小梁川遺跡（宮城県教委1986・1987b）、山形県舟形町西ノ前遺跡（山形県埋文1994）、米沢市台ノ上遺跡（米沢市教委1997・2006）、福島県磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡（福島県教委1991）などに見られ、長期にわたる累積の結果として住居跡や貯蔵穴が環状の分布を形成し、中央に遺構分布の希薄な空閑地が残置される（第16図）。本遺跡の調査区西側には平坦面が広がり、集落の施設配置を規制するような地形変化は認められず、トレンチ調査で調査区北西側に続く遺構分布の広がりを確認していることから、これらの集落と同様に環状構造の遺構配置が展開している可能性が高いと考えられる（第17図）。また、これらの集落の多くでは環状の遺構配置の外側に面した斜面や沢状の落ち込みに大規模な遺物包含層を形成しており、本遺跡においては後背湿地に面した東側緩斜面や南西側斜面部、表面観察で濃密な遺物散布が認められる北東側の緩斜面などにまとまった遺物包含層の形成が予想される。

## 5. 集落における諸活動

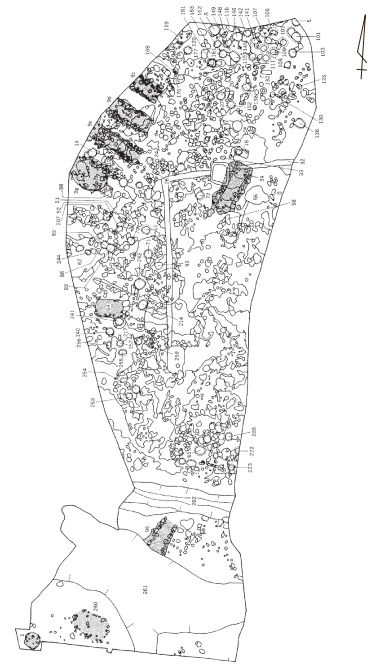
**集落の規模** これまでに述べてきた通り、確認した遺構の内容と配置および出土遺物の内容と量から、本遺跡



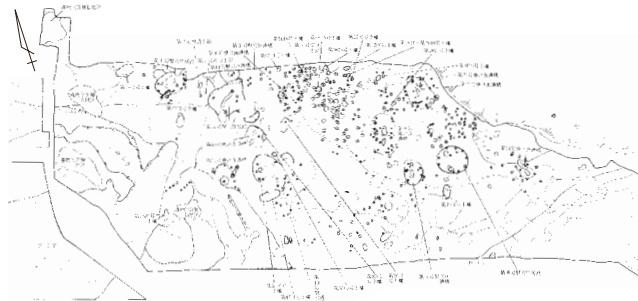
第15図 遺構配置の変遷（3）



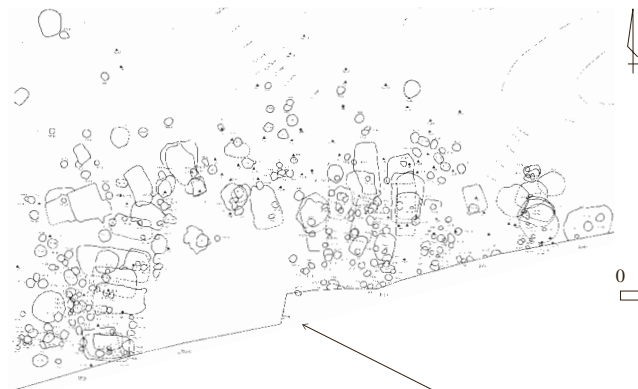
1. 小梁川遺跡 (宮城・七ヶ宿, 宮城県教委 1987b)



3. 西ノ前遺跡 (山形・舟形, 山形県埋文 1994)



2. 中ノ内A遺跡 (宮城・川崎, 宮城県教委 1987a)



0 50m  
S = 1/1500

4. 台ノ上遺跡 (山形・米沢, 米沢市教委 1997・2006)

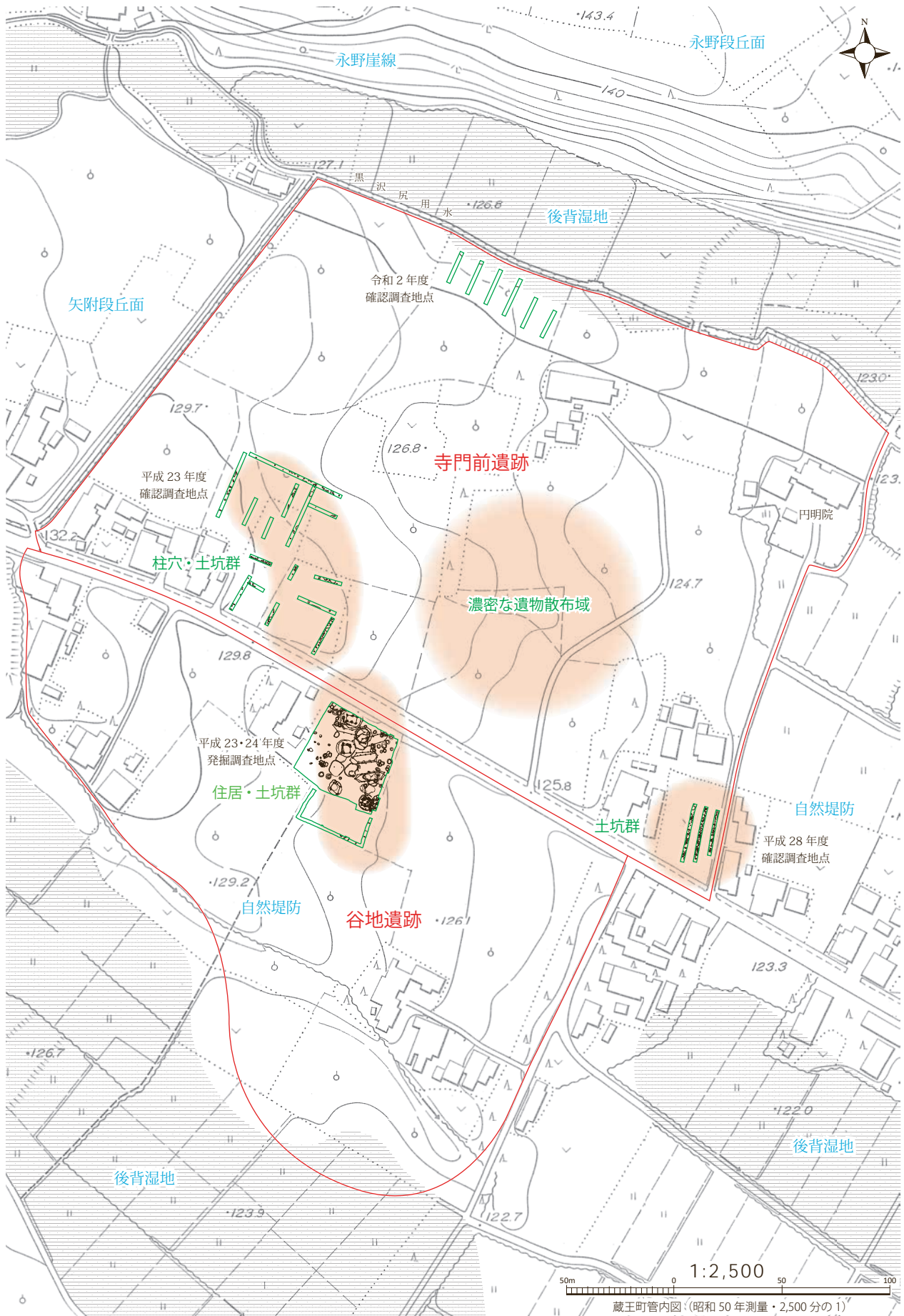


5. 法正尻遺跡 (福島・磐梯・猪苗代, 福島県教委 1991)

0 50m  
S = 1/2000

第16図 拠点集落跡の遺構配置





第17図 谷地・寺門前遺跡全体図

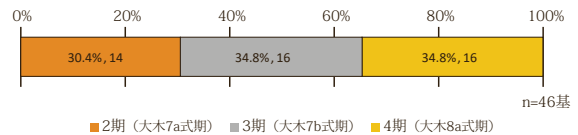
の集落は比較的大規模かつ中核的な性格を持つものと考えられる。本遺跡の土器編年に基づく1～4期の時期区分のうち、集落期は2～4期（大木7a式～8a式期）であり、遺構の機能時期推定と遺構配置の検討から集落期を通じて各種の施設が安定的に営まれたと考えられる。時期ごとの集落の規模を推し量る尺度としては住居数が最も適当と考えられるが、今回の調査範囲は限定的で集落全体のどの程度を占めるのか不明であるし、確認した住居数も少ないことから時期ごとの比較も難しい。ここでは、調査区内で一定数を確認し、住居に次ぐ尺度として集落内の人口維持に重要な役割を果たしたと考えられる貯

蔵穴数を参照してみたい（第18図）。確認した55基のうち、機能時期が推定できたものは46基であり、時期ごとの内訳は2期14基、3期16基、4期16基となっている。ほかに出土遺物からの推定が困難であるものの遺構配置から4期に位置付けたものが2基あり、これを加えるとやや増加傾向を示す。調査範囲の問題はなお残り、土器編年による時期区分の時間幅が未確定であるという問題もあるが、時間幅を概ね均等と仮定して時期ごとの変化を検討することが許されるならば、全体の規模は不明ながらも同程度の規模の集落が維持されたと考えられる。なお、既述の通り3期には大型の貯蔵穴が卓越し、前後の時期と比較して総貯蔵量も多かったことが想定されるので、これを考慮すると集落規模は3期を最盛期とする可能性がある。

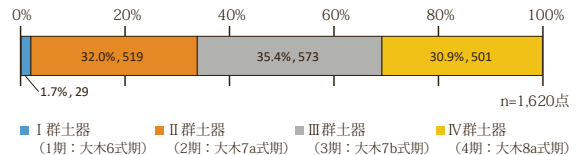
**集落における諸活動** 同様に遺物量の面から集落内における活動量を推し量ると、抽出分類した縄文土器のうち時期が明らかな1,620点の内訳は1期がごく少なく集落期の2～4期が各3割程度と均等な組成を示す（第19図）。あくまで抽出分類であることと、小片でも型式比定されやすい土器とそうでない土器の存在などから正確なデータとは言えないが、大まかな傾向としては大過ないものと考えられる。このことから、比較的大規模かつ中核的な集落が2～4期にかけて存続し、各時期において集落規模に比例して活動量の大きな諸活動が展開されたものと考えられる。

出土した遺物は殆どが製作・使用場所から移動されて意識的に廃棄されたものであり、集落内で発生した生活残滓である。これらの廃棄遺物には、具体的には前節までの検討で明らかにした通り、使用の痕跡を留める土器のほか、土器・土偶の製作に伴う焼成事故品、石器製作に伴う接合資料、破損ないしは刃部再生により損耗した石器や転用により損耗した礫石器、人為的な加撃によって破断した石棒、住居構築材を含むと考えられる炭化材、食糧残滓を含むと考えられる焼骨片や炭化種実などを含んでおり、個々の遺物の検討によって集落内における諸活動をある程度復元することが可能である。

集落における諸活動の主なものとして、特に調査区周辺においては集落期を通じて縄文土器・土偶の製作が活発に行なわれたと考えられる（第3・8節）。加熱調理に伴う器面の赤変や炭化物の付着、口縁部や外底面の摩耗といった使用痕跡を留める土器も一定数出土しているものの、一般的な集落遺跡における比率よりもかなり少なく、製作に伴う焼成事故品の廃棄行動が繰り返されたことを示す。石器の製作についてはガラス質流紋岩などの在地石材を用いた石鏃・楔形石器など小型石器の製作と、主に素材剥片や製品として搬入されたと考えられる珪質頁岩を用いた二次加工による石器製作や刃部再生を中心とするものであったと考えられる（第5節）。調査区内においては4期にガラス質流紋岩の剥片・碎片などの石器集積が見られるが、全般に製作痕跡は希薄であり、破損ないしは刃部再生により損耗した石器や転用により損耗した礫石器が多く出土していることから使用・廃棄が中心であったと考えられる。



第18図 フラスコ状土坑の時期別組成



第19図 縄文土器の時期別組成

動物資源利用ではニホンジカ・イノシシが卓越し、これらを対象とした儀礼行為を行っていた可能性もある（第9節）。これらの焼骨片は集落期を通じて包含層などに混じり、4期には住居床面などに集積が見られる。植物資源利用ではクリを食料資源の主体とする一方、住居構築材などの材料資源としてもクリ材を多用していた。自然状態の資源利用で両立するとは考えにくく、クリ花粉が検出されていることから集落の周囲に人工的にクリ林を形成し、計画的に管理していた可能性がある（第9節）。

3・4期の居住施設の主体は竪穴住居であり、中央に小規模な地床炉を持ち床面に顕著な硬化面を形成する。先行して2・3期に建てられる長大な亀甲形の掘立柱建物は、長軸方向に線状に並ぶ地床炉が特徴的であるが、床面に硬化面を形成しないことから人が常駐する居住施設ではなかった可能性があり、柱穴の形態と配置がやや不揃いであることから大型の仮設的な建物とも考えられる。その場合は、線状配置の地床炉と上述の諸活動との関連で考えれば、①焼成前の土器を風雨や直射日光から保護し、炉の焚き火によって均一・安定的に乾燥させる乾燥・保管施設。②多量に採集した堅果類または加工食料などを風雨や動物・虫による食害から保護し、炉の焚き火の煙で燻すことで防虫・殺菌・乾燥させて保存性を高める燻煙施設などが推定できるであろう。

縄文土器とともに製作された多量の土偶や、アオトラ石・蛇紋岩製磨製石斧など遠隔地産石材製石器の安定保有は、本遺跡が中核的性格を持つ集落であったことを示しており、主に調査区内で把握された上述の諸活動のほか、集落全体としてはさらに多様な空間利用と諸活動が展開されたと考えられる。このことについては、縄文土器・土製品の活発な製作を具体的に裏付ける焼成遺構の確認や、集落内における在地・遠隔地石材利用と石器製作の実態解明、調査区外における遺構配置の展開と集落構造の解明、2期における大型掘立柱建物の機能と居住実態の解明、1期における集落形成の有無などの諸課題と合わせて、今回の調査区外における将来の発掘調査も含めて今後も継続的に検討を加えていくことが必要である。